第１回　香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会
議事録（要旨）

■開催日時：平成 29 年 8 月 28 日（月）13:30～15:30
■開催場所：香南市役所本庁舎 3 階第 4 会議室
■出席委員：受田浩之委員長、田内修二副委員長、竹内　淳委員、北村　佶委員、中内　寛委員、高橋丈夫委員、小松健一委員、中澤麻友委員、塩次加奈子委員、山中和男委員、國松美紀委員、前田和彦委員
■事 務 局：村山農林課長、猪原商工水産課長補佐、山下こども課長、岡林地域支援課長、西内企画財政課長、浜田企画財政課長補佐、田渕

【次第】
１．開会
２．委員長あいさつ
３．年間予定の確認
４．議事
（１）平成 28 年度取り組み状況
（２）平成 28 年度目標達成状況（進捗状況シート）の確認

■委員　資料２－７の空き家・移住促進について、モデル地区を中山間地域にしており、沿岸の空き家は対象になっていない。おそらく、南海トラフの関係があると思う。

吉川町で空き家が何軒あるか調べたところ、本年４月では 68 軒。空き家のまま放置するのは、景観や火事の危険、白アリなどの関係もあり迷惑になる。仮に壊すとなると個人に負担がかかる。また、更地にすると固定資産が上がると聞いている。上がるとダブルで個人に負担がかかってくる。

空き家はこれから増えていくと思う。移住がまず難しいのであれば、これから空き家をどうすればいいかと非常に気にしている。

■事務局　資料２－７のお試し住宅や移住者支援住宅は、中山間地域に限らせてもらっている。ただし、空き家バンクの登録については中山間地域と関係なく、香南市をすべて登録出来るようになっている。

例えば、「空き家がある。」「所有者の方がはっきりとわかる。」のであれば、ぜひ空き家バンク（香南市は現在 12 軒の登録（契約済・入居中含む））に登録をお願いする。吉川の空き家も含めて、空き家バンクを増やしたい。ただ、どうしても所有者の方の同意と、借りられる方も含めての検討は必要と思っている。

■委員　吉川町の地図に空き家がどこにあるかは落としているので、どの辺に空き家があるは分かっている。例えば、海岸から離れている錦地区は海岸から 1.5 ㎞のあたりだが、そ

こで海抜７ｍある。だが南海トラフ地震が起こったときは４ｍの津波がくると言われている。空き家を地図に落とす作業はしているが、移住してくれる人はまず無理だと思う。これからも空き家は増えると思うし、一人世帯も増えている。長く対策を考えていかなければならないところではないか。

■委員長　かなり大きな問題を指摘いただいているので、少しずつ整理していかないといけない。

空き家バンクについては、登録制度があって、先日、香南市の産業振興計画の合同部会が開催されて、その中でも話題になっていたが、全 12 軒のうち、2/3 程度は問合せや借り主が現れていて、「登録していただくとかなりの確率で利用していただく方向に向かいつつある。」と話があった。したがって空き家をこのバンクを通じて登録していただき、この後の改修の費用等も上手く連動させていき、香南市に移住したいと希望を持っている方々に「より多くのハード的なものを用意している。」と市をあげて取り組んでいくということが一つあると思う。

一方で、委員から指摘・質問のあったように、沿岸部をどう見ていくかという話。これに関しては、まちづくりについてのゾーニングを今進めているところもあり、これがどういう風に、今後具体的に展開されていくかとも連動しているのではないかと思われる。

■副委員長　沿岸部（津波の浸水予想エリア）について、人や家、土地が動いていないという実情は、委員が言われるようにあると思う。将来的な長いスパンで考えていくならば、高台移転を含めた沿岸部の在り方があり、短期的に市として取り組んでいることは、海岸の防潮堤である。高知海岸等で実施されている事業（国の直轄海岸）については、南国市から順々に東の方へという形で要望をしているところです。まずはそういうことをしていきながら、地域の皆様方と長いスパンでの話し合いは、今後地域ごとでしていきたいと考えている。

■委員長　そういう意味では、まちづくりグランドデザインのなかで、長期的なゾーニングを、各エリアの有るべき姿も描いているので、そのことも視野に入れつつ、今住んでいる方に対する対策、同時に、現時点で空き家を抱えているところをどのように活用し、また、活用出来ないところをどういう風に対策をとっていくか。これも全国的に全て通じる問題でもあるので、少しずつ良い方向にもっていかなければならないと思う。

長期的なことを念頭に置きつつ、対策を講じていくということなので、空き家対策については、まず利用できる分は利用していくという考え方が根底にあって良いと思う。利用していく第一歩として空き家バンクというのは非常に有効で、香南市においては、移住者にとっては切り札になる可能性が見えてきたので、まずはそこを重視していく考え方というのはあるべき姿ではないか。

さらに、伺いたいのは 68 軒の空き家があるということは、住民の方とも話をされたかということでしょうか。

■委員　自治会の方にお願いして広報を配布する際に「空き家も確認してください。」として

確認したものなので、多少違うかもしれないが、ほぼ間違いない。

沿岸部の人たちは、津波が来るので、借り手はいないだろうと自覚している。先ほど言ったように、壊したらお金がかかる。また税金も上がる。どれだけ上がるものか。

■副委員長　言われていることは、６分の１軽減のことと思われる。家を建てている人が、家を壊すことになることで、家の建っている場所の軽減がなくなる。という話をされているのだと思う。

抜かっていたが、防災対策上のことになるが、古い家（一定の基準はある）であると、取り壊しに補助制度（老朽住宅等除去事業）がある。上限額（164 万 5 千円）は決まっているがその内の 80%が助成される。ただ、基準があるので、新しいのを壊すというのは対象外。そこが避難経路に面しているなどさまざまな基準があるなかで、そういう補助制度もあるので、もし、自治会の方でピックアップされているなら「今こういうお家がある。」ということを、防災対策課の方にご相談をしていただきたい。これは、強制的に壊すことができないので、持ち主の方がということにはなる。また、このような補助制度もあるということを自治会でも周知をお願いする。

■委員長　今のようなお話を家の持ち主の方と、行政の方の制度的なものもしっかりと認識して前を向いてどうすればいいかを議論すれば、道は違って見えてくる可能性がある。

今日は非常に意義のある数字を出していただいた。市としても空き家対策としては、それを調べることがまずは第一歩ですし、後はその持ち主の方が空き家と認識しているかどうか、そこの意識のズレも大きな問題になっている。その中で、本来はこの家を手放しても良い、空き家バンクとして提供しても良いと思われている方が、「もしかしてこんな不利・不利益があるのではないか。」と思われるのであれば、それを解消していくように個別に対応していく、それを１つ１つやっていくしかない。

この話は全部連動していて、自治会の活動を活性化する話とも繋がっている。このような議論を展開していってもらって、個別に対応していっていただければと思う。

■副委員長　空き家を地図に落とし込んでいく際には、地域支援課などと情報を共有することから始めさせていただいて、何がいいのかを一緒に考えていただければ大変ありがたい。

■委員長　丁寧に、またお互いが綿密に協議できる場があれば、解決できるところから着手できると思う。是非お願いしたい。

■委員　資料２－５の新たな取り組み「大型クルーズ船」について、2 月の時の議事録に話が出てきている。その時に、「直売所ということに関して、もっと大型にしたら。」と言ったことに対して関連して出て来たことですが、『「大型クルーズ船はリピーターが期待できない。こういうマーケットにエネルギーを投入しても、おそらく得るものはほとんどないと思われる。したがってＤＭＯの視点でやっているようなリピーター獲得視点となると、たぶん大型クルーズ船はターゲットではなくて、より高品質な客単価が望める航空機利用顧客の方が優位性が高い。そういう視点からＤＭＯがどういう観光ルートあるいはオプションを、滞在日数を長期化できるようにメニュー化していくかという話が求

められる。」』というところと、『「域内消費あるいは域内購買率が高いということは地産地消という意味では、まず最も域外への機会の損失が少ないということなので、そこから地産外商へ持っていく地産地消、外商という一番いい流れがご当地では可能であると考えると、６次産業化のあるべき姿あるいは産直、直販の規模をどういう形にし、ストロー現象を抑えるためにどういう動線で、ということになりご当地が考えているまちづくりグランドデザインのゾーニングの話と連携していくので、これを今の話から発展させていけばいいのではないかと思う。」』ここに、こういったことが反映された形跡が無い。これは意見として出たことで、反映しないのかということか教えてほしい。

■委員長　これは私が発言した内容を引用していただいたと思う。流れがあるので、それだけを申し上げたということではありませんが、大型クルーズ船のリピーター客をどこまで見込めるかということと、直販所を含めた顧客の動線ということ、どういうふうに戦略上描いて行けるか、これをしっかり考えて行こうという話は申し上げた。それが、盛り込まれていないことに関してどうかという意見ですね。

■副委員長　大型クルーズ船に関して、来てはいますがリピーターということでは、大型クルーズ船で一度来た方がまた来るという状況にないことは確かです。リピーターの方をターゲットにするならば、飛行機や車であるというところが対象になると思う。

ただ、間違いなく高知新港へのクルーズ船は増加しているので、その来ていただいた方に、香南市で経済効果があがる仕組みを平成 29 年度考えていこうということです。ただ、実情として課題として上がってくることは、クルーズ船が来ていただいた段階でいくらＰＲしても、１日何時間いるとしても、船を下りる段階ですでにその方々の行動の行き先はいくつか決まっているという状況もある。降りてきたお客様にＰＲを行うよりも、乗る前のオプショナルツアーのなかに、香南市の観光施設などを組み込んでもらうか、ということが今後の検討課題になってくる。

■委員長　大型クルーズ船が入港したあと、いろいろ船が入港してきているので、ここで十把一絡げにして、クルーズ船、外国船とみなすのは少し危険な状況であるということは承知をしているが、その点は別に議論するとして、香南市・あるいは南国・香美・こちらの方へのお客さんの流れは、どのように認識されているか。

■委員　先ほどの話でいうと、予めコースが決まっている場合と、ＰＲしてタクシーをチャーターするなど自由にコースを選択できる場合など、色んな形態がある。最初から決まっているツアーというのはなかなかＰＲが難しいと思われるが、事前に情報が入って来る場合は、そこで観光パンフレットを配るということはできる。ただ、クルーズ船も来る時期があるので、前から来ると決まっていた場合と、急に航路を変えて来る場合があるので、そこの分析や情報収集を県としてもやっていかなければならない。観光振興部が窓口となっているが、クルーズ船の入港が急に増えたので、まだ十分な分析ができていないことは課題として認識している。物部川流域としてやっていくことは、なかなか香南市だけでは難しいので、事前にコースが決まっているコースを売り出していく。例え

ば、西島園芸団地や龍河洞、絵金などのパッケージを組んで事前に売っていく方が早いかもしれない。そういった仕掛けを事前に考えていく。まさしく動線の部分だと思う。動線という部分で、周遊コース、観光コースでまずパッケージ売り出していくということを行えばいい。香南市・物部川地域には、海・山・川がコンパクトにまとまっているという強みがある。空港や高速、新港など交通の要所から近いこともあり、発展の可能性は非常に高い。そういった面で、観光は非常に伸びる産業だと我々は期待しているところである。

■委員長　平成 29 年度の新たな取り組みが大型クルーズ船誘客促進事業のみに限定されているように写っている部分もあるかと思うが、従前のＤＭＯの話もあり、今の話のようにコースを用意できるかというところが、観光クルーズ船に対する魅力の提供という部分でも重要で、繋がっているのだと思う。

平成 29 年度の新たな誘客促進事業のところで、どういうふうに考えているのかということは、繋がりの部分で十分妥当かということを精査いただいてよろしいのではないか。ちなみに、私の発言としては大型クルーズ船が全く役に立たないと言っているのではなく、いろいろ話を伺っていると一口に大型クルーズ船といっても、相当顧客層が船ごとに違うと言われている。例えば、今私は牧野植物園の理事をやっていたり磨き上げの副委員長をやったりしているが、その中では大型クルーズ船の中でも、こういう顧客が乗った船に対して何が提供できるかという話もし始めている。船ごとでのマーケティング戦略を明確にしていかないといけない。そういうところまで来ているというのは事実で、また、そういう意味では選べる、色々ターゲティングできる大型船の入港数が増えているので、そこをしっかり分析しながら対応を図っていくということが求められている。そうゆう段階にほぼ突入している。

この観光に関しては、おそらく産業振興計画のなかでも非常に重要なポイントになってくので、今後も更に議論は深まっていくのではないか。

■委員　シャトー三宝の耐震診断について、結果はどうだったか？それと合わせて、平成 29 年 4 月 1 日から平成 34 年 3 月 31 日まで無償で提供された。ということなっているが、駐車場は開けているか？

■副委員長　三宝山につきましては駐車場と入口は閉めている。それと、三宝山の観光につきましては、職員での協議、またさまざまな所との協議を行っており、考えているところである。流れといたしましては、今までつくってきたものを、更に磨き上げをかけた構想を 10 月頃ぐらいまでに策定し、それをもって、事業者の公募をしたいという思いをもっている。

その公募の結果を受けながら、事業者を含めた形で基本計画を作っていきたい。今、県の観光振興の補助金を活用しながら進めているというのが実態です。

■委員　事業をやるのも大事だと思う。香南市は三宝山の魅力をあまり感じてないかもしれない。実は、そこは周りが全部見える。「香南市がどんなまちなのか、高知県にはどんな

まちがあるのか。」を説明する時に、私は県外から来た人たちをまずそこに連れて行く。そして香南市はこういうふうにやっている、ここは農業（園芸）を中心にやっている。街はここにあって、空港がすぐ近くで非常に便利です。坂本龍馬の銅像も桂浜も見える。周りをぐるっと見渡すと市全体が分かるし、非常に素晴らしいところだと思う。事業をやるのも良いが、それまでである程度みんなに開放し、治安の面色々あると思うが、その点は何とかできるのではないか。

■副委員長　龍河洞など周りに色々な観光施設等が民間も含めてある。物部川流域というくくりの中で、今後どう活かせていくかということで、今さまざまな検討しているのが実情です。ただ、確かに５年間無償で借りているので、イベントなどで使用はしやすくなりますし、事業に興味があるという方に見て貰うということはできるようになっているが、まだ、今の状況で日々開放するというまでは至っていないというところです。

■委員　アクトランドや動物園、龍河洞、アンパンマンミュージアム、そこら辺を一つの流れにしてタッグで色々やる。山の上をバイキンマンの城にしたらどうかと言ったこともあるが、点ではなく線といった格好でやるほうが、道が開けると思う。

■委員長　三宝山は香南市の観光も含めた、かけがえのない資源だと思う。それを使いきれてないという状況を市民レベルでみればもったいないという思いと、是非具体的に使っていくプランをしっかり描いてほしいという思い、これはもう多くの市民の皆さんの共通する思いなのでないか。今までは耐震診断の結果を待っていたところもあるので、診断結果が出て、これからどうするかという所に繋がっていって、皆さんが納得できる計画とその方向性という議論をお願いしたい。

先ほどのお話の線でというところで、必ず繋がっていけばものすごく大きな資産になるので、是非お願いをしたい。

■委員　農業の「③担い手対策の促進」の青年就農給付金事業について、「就業相談は多かったが、事業の要件が厳しく該当はいなかった。」ということで、引き続き相談者が多いので取り組みを継続していく形だと思う。この青年就農給付金について、せっかく担い手、就農したいということだがこれに「該当しない」。該当しないこともあると思うが、その他の色々な事業との兼ね合い、例えば「新規就農者として、平成 28 年度は各種補助金の活用もあり、14 名が営農を開始。」と書いてあるが、ここの関連など説明をしていただきたい。

■事務局　青年就農給付金は H28 年度までの名前になっている。青年就農給付金の中に経営開始型と準備型の二つがある。経営開始型は農業を始める前。研修とか色々やる間に２年間だけ国の支援（補助金）を受けてできるという事業。開始型というのが、農業を開始してから自分が主としてやり始めてから５年間。個人（1 人）であれば年間 150 万円、夫婦であれば 225 万円というお金がもらえる。ただ、これは営農している利益によって金額に影響が出てくるが上限がその金額である。

先ほど言われた「対象者がない。」いうことについては、国の方から今までは「Ｕター

ンでもＯＫ」というのがあり、「Ｕターンで親と同じ品目を作られる方」の条件がかなり厳しくなり、ご相談もあるがどうしても該当にならない。去年から市の単独事業で、「後継者の親と同じ品目でも構わない。」ので、2 年間だけだが年間 100 万円ずつ、という事業をつくっている。去年は確か 11 名とお伺いしている。市の単独事業については、あまり制限が厳しくない。国の事業については営農をしっかりしてなければ後で返金や以前の方であれば５年間の内に親と同じ品目でも構わなかったが、農地を子どもに譲渡することが条件となっていた。今はかなり厳しくなりすぎて「親の同じ品目はだめ」、「親の三親等以内の土地を借りたらだめ」など、厳しい条件があり、まったく違う人の土地を借りるのなら構わないが、品目まで同じのはだめとなると補助金を受けられる方が少ないというのが現状です。

■委員長　産業振興計画やこれまでの委員の皆様からいただいた意見も、先ごろの事業に反映されて、かなり柔軟な補助制度を独自に設けていただいたということですね。

■事務局　はい

■委員長　そういう意味では意見が成果に表れてきている。対象者がいないものに関しては、市独自にどうしたらいいのかというところも考えていくことができるので、ご意見をいただきたいというところと、先ほどのご質問のなかでは、市の単独事業など新たに設けることによって、市の新規農業者数が目標値を超えた、という風に理解をしていいのか、繋がりはどうかとういうのも質問の一つだったがいかがか。

■事務局　新規で立ち上げたから増えたというのはなかなか判断しづらいところである。なくても就農するという人もいる。１人に補助金を交付したので増えた、ということにはならないので判断しづらいところであるが、就農しやすくなったとういう点では、考えても良いと思っている。

■委員長　いろんなご意見をいただき、そして反映をできるようにしていただいたらよいと思う。

■委員　農業の場合は新規就農者の目標が百何十%とすごく増えているようなイメージになるが、実際、現実には農業は退職する必要がない。農業を辞めてもそのまま農地はそのまま続いていくことになる。実際は現実に後継者がいないということがほとんど。耕作放棄地になるのは耕作放棄地がある周辺で水の便が悪い、交通の便が悪いとかそんなところがなっている。国の政策で中間管理機構ができ、良い働きをするかと思ったが、我々が思っていたものと全く違うもの。「農業振興地区の土地でないとだめ」とか、「借り手があるようなところでないとだめ」、「優良農地の土地」だとか、まったく我々の期待とは違う、そしてもう農業（周辺）はだんだん廃れていくしかない。

■委員長　その辺の実態と国が一般的にこうだと型にはめてしまう。そこのギャップを埋めていくか。それは、認識として差はないか。

■事務局　そうです。

■委員長　市単独の色々な事業を充実させていくと同時に、国に対してもどういう風に政策提言していけるか。その自由度も含めてしっかり現状を伝えていくというのも必要になって

くると思う。

■委員　今、農家の数は減っている。ただ、園芸について面積は減っていない。出荷高も減っていない。というのは、その下にある環境制御技術、これにより一戸の農家の面積が増えて、収量が増えているのが現実。非常に農業を心配しているようだが、頑張っている方はお年寄りの分を全部カバーしているという風に考えていただければ、まだまだ、香南市・高知県の農業は十分いけると考えている。

さらに、農業部会の方で農林課の色々な補助金に対して、「今、一反で一千万円の資金がいる。そのお金をこんな小難しい条件付で補助金を出したって利用者はいない。」というのが農業部会の意見だった。そういう意見を反映して、市単の補助金も色々考えてくれた。非常にありがたい。

■委員長　今の農業部会のコメントというのは、今議論していることも含めて、良い方向に向かっている部分がかなりある。

■委員　農業だけに関しては、ＫＰＩにしてもＡ＋の方にずっといるので、順調にいっていると思う。

■委員長　今言われた頑張っているところ、事業規模を拡大して、所得の向上が見込めているところと、あとは、就農者がいなくて耕作放棄地になる懸念がある場所、当然域内にもあるかと思う。それを上手く融合していき、さらに香南市全体の生産額の向上や所得向上に結びつけていくかというところが大事である。

■委員　荒廃農地というのは、条件的には悪い部分もある。

■委員長　その部分は、またゾーニングの話になる。条件の良いところと不利なところをどうやって整理し、住み分けていくかという話。最終的にはそういった所とも繋がっていくべき。

この議論は、市全体で課を超えて共有していく部分である。

■委員　仕事の方が忙しく、「子どもを保育で預けたい。」と申請しているが、途中入所はまったく空きが無い状態。聞いてみたら、「保育士さんがいない。募集はずっとかけているようだが、なり手がいない。」というのと、先日１箇所１人だけ枠が空いたが、10 名ほど募集が来た。子どもが増えているのかなというのもあるが、それに対応する施設や人員が保障できてないというのが目の当たりになった。

それと子育ての環境について、雨の日、小さい子どもたちを遊ばす施設があんまりない。近くでいえば、香美市の森林センターというところで、割と小さい施設だが木のおもちゃなどで遊べる。子育て世代のお母さん達には割りと有名なところだが、香南市には思い当たらない。雨の日は何をしていいか持て余してしまい、そういう時に対応できる施設を。先ほど吉川に空き家があると言っていた。また、地引き網の漁獲高がかなり減っていると言っていたので、そういうものを組み合わせて、施設の中で、網を登ったり、子どもが遊べるようなものを造れたら。

例えばになるが、アメイジングワールドという大きな施設がある。子どもたちが遊べ

るような、そこまでいかなくても、地域性を出した雨の日用の施設があればすごく助かる。そこに、県内からたくさん親御さん達がくると飲食のコーナーができたりと、色々組み合わせていけるのではないかと思った。

■委員長　極めて深刻な子育て支援の状況、待機児童の話です。

■事務局　年齢の低い子どもさんのことですけど、子ども３人に対して保育士が１人つくようになっている。また、学級編成などあり、１人増えたらクラスを分けないといけない。運営が難しいということになり、年度途中での受入というのがすぐにできない。やりくりもしており、民間のこども園などにも話をし、できるだけ空きをつくり、受入体制をつくっているけど、根本的に保育士が不足しており、なかなか年度途中では難しいというのが実情です。これからも、できるだけ改善していくようにしますが、ご理解をお願いしたい。

■委員　少子化対策の基本。それには、「別枠で予算をとる」とか「保育士が足りない」面では「保育の先生をやっていて止めたとか園長先生で定年になったという方を、臨時で雇う」など対応の仕方を考えたら色々あるのではないか。県内や町内でも保育士の資格を持った方は相当いると思う。

■事務局　香南市だけの問題ではなく、高知県とか全国的に足りない。保育士の取り合いみたいになっている。

■委員長　そこの部分はもう競争でもある。例えば、こういう問題こそ移住と結びつけていけるのかというのが一点と、あとは地域内で何とかするためにファミリーサポートセンターを作った。香南市は佐川町・高知市に次いで３番目にファミサポをつくって、そこを充実させようとしているが、なかなか数が伸びてない。ということは、ここの部分は市・民としてなんとかできないかというところの試金石になっていく部分なので、連動してやっていかないと、保育士の取り合いだけの競争に巻き込まれても、今苦労をされている方の解決策にはならない。ファミサポに対してはどうか。

■事務局　ファミサポというのもあくまで一時的な部分への対応といったことになる。就労とか根本的な形で、１日単位で保育の必要なご家庭には、対応するのは難しい。利用料も１時間 600 円で決して安くない。

■委員長　地域内の子育て環境が恵まれて、地域内の方々が満足している状況が求められるのと、だからこそ移住してきて、その環境に身をおいて暮らしてみたいということが連動してないといけない。今の意見は、非常に深刻に受け止めるべきで、ここを我慢してくださいだと、そういった条件の方がいた時に、その方々が地域外にでていく可能性すらある訳ですから、この意見を相当深刻に受け止め、具体にどうしていったら良いのかを、その我慢や理解でなく、次のアクションも含めて何とかしていかないと、やっている意味がなくなるのではないか。

■副委員長　お子様が当然年度を通じて生まれてくる。それと、母子手帳等で一定時期というのも当然つかめる。市としての基本はそういうことも踏まえて、そういう皆様方のご要望に

お応えするよう、できるだけ体制を早期に整えていきたい。

ファミリーサポートセンターの話もでてきたが、当然そこの充実も図っていくようにこども課のほうで取り組んでいくはずです。

それと、雨の日というのとちょっと違いますが、総合子育て支援センターが野市駅の南側に、今年設計をして来年度整備を行う予定。そこでは、今までは週何回という具合で回っていたが、月から金曜日までは常設で開けている。プラス出張という形で出向いていこうと思っているので、そちらの方が出来れば、雨でも晴れでも充分利用することはできると考えている。ただ、言われていたものと利用の形態がちょっと違うかと思います。せっかく作るものですので、この意見も踏まえて利用形態についてどういう在り方が良いのか。すぐにお答えは出来ませんが、今後検討したい。

（３）平成 29 年度全体像および新たな取り組みについて

■委員長　高知学園短期大学や高知大学教育学部などの教育機関と連携をさらに密にすることにより、不足している人材（保育士）をいかに確保していくか、域内でそういう人材の確保をどう進めていくのかというのも見えてくるのではないかと思う。

この資料３－３の地域支援課を中心に移住定住という取り組み。これは、非常に大きな取り組みになっていく可能性があるなと思っている。８月２５日に開催した、産業振興計画合同部会の中でも、「移住を中心に横串を刺していきましょう。」という話を産業振興計画の観点では始めている。まち・ひと・しごと創生総合戦略に係わる委員の皆さんにも積極的なご意見をいただき、今後の方向性について色々アドバイスいただければと思う。

■委員　農業活性化地域協議会のところで課題がある。後継者および収穫時期の労働力不足。特に柑橘みかん類など不足している。これから団塊世代からリタイヤしたら、おそらくまだまだ人手不足が深刻になる。課題を書いてあれば、解決方法も一応文言としていれないといけないと思うが、解決方法においてはその言葉がない。なかなか難しいと思う。色々な方法、例えばシルバー人材センターもあるし、所属していない人とかも、収穫の楽しさなどは楽しめるので、別の分野からのアプローチがあってもいいのではないか。

もう１つ、総合子育て支援センターが今度できるということだが、自分にも孫がおり、子どもの具合が悪いときは、私たちに預けて娘は勤めに出ていた。保育へ迎えに行って家で見守るということをしていた。女性の立場に立ったら、男性でもありますが、園からの呼び出しがあって行くというのは、同僚の気兼ねや職場のムードなど、非常にうるさいと思うこともあるのでは。保護者が勤める状態で、このファミサポで対応できないものか。病気になったら何日も職場を休むというのは親にとっては当たり前だが、色々遠慮する事があると思う。

■事務局　高齢化とか担い手が少ないという現状があり、収穫時期に非常に人が足りない。そういう話を聞き、この農業活性化地域協議会の中でインターンシップや農業の体験モニターなどを集い、農業の繁忙日にお手伝いをしてもらい、農業に興味があれば担い手になって戻ってきてもらえるような活動をしたい、という現状である。みかんについては色々考えているものがあり、廃園になるというところも色々聞いており、そういう所と移住と関係しているが、「夫婦でやりたい。」という方がいればマッチングを考えたりしている。インターンシップも学生からやりたいと考えており、昨年については高知大の栄養学部の学生さんをショウガとみかんに１日だけ体験してもらった。そこから農業に関心を持っていただき、「農業をやりたい。」という子ができれば良いと思う。具体的にシルバー人材センターなどの案もでているが、難しい面もある。農業は大体雇用を抱えており、年にその班が回っているという状態も聞いている。親方さんがおり、チームがあり「11・12 月はみかんへ行くぞ。それが済んだら次へ。」という状態であり、短期のみかんは働いてもらうにもなかなか難しいという点がある。学生などに興味を持っていただけたらと考えている。

■委員長　学生のマンパワーも期待大ですが、ずいぶん前から援農隊を学生が組織してインターンシップ的にお手伝いすることをやっているが、一定の限界が見えてきている。今からのチャンスとしては、都会の大学から地域に人を勧誘する為のインターンシップなどのさまざまな教育の機会（ソフト的）に国の予算が注ぎ込まれ、地方にいく機会を増やすということが今年度から盛り込まれていく予定。例えば、県と東京農大が連携協定を結んでいる。あるいは他の大学との就職支援の関係で連携協定を結んでいる中央の大きな大学があるので、そういった特別なご縁を通じて、「香南市の支援になるよう。」「計画的に秋口の繁忙期にマンパワーとして是非学んで欲しい。」というような企画を考えていくというのは、この秋口から来年にかけての大きなチャンスでは。

いかにご縁を、ストーリー性を設けていけるか、これにかかっている。

もう１点。大豊町の碁石茶の生産のマンパワー不足を、親衛隊ということで、３ヶ月間大豊町で碁石茶の生産を手伝ってくれる人を募集した。結果的に 10 人の募集枠に対して相当の方が手を挙げてくだり、その内の７人が移住した。その後、３ヶ月を超えてそのまま移住している。この確率は相当高くて、地域おこし協力隊の場合はおおむね３年の間に定着するということを求めているが、わずか３カ月でも移住・定住する。いかに機会を設けていけるか。地域の方々がそうした力をどれぐらい求めていて、環境がいかに充実しているか。というところをセットにすると必ず道は開けてくる。単発で人が足りないから来てくれというのだと、もう繋がらない。いかに連携して移住・定住と繋げていけるか。さっきの資料の３枚目の部分が鍵を握っていると申し上げたのは、そういった意味合いもある。

■事務局　急に体調が悪くなったお子さんのお迎えというところで、ファミリーサポートセンター事業では制度上は可能。ただ、制度の仕組みとして支援を受けたい家庭と支援ができ

る、というそれぞれの会員さんのマッチングが非常の重要になる。それまでに何回も通常の健康な状態での預かりなどの実績を重ねたうえで、こういう急に具合が悪くなった時もお願いできないかという、手前の話が前提になる。いきなりよく知らない、特に体調の悪いときに預かってくれるっていうのはなかなか難しいと思うし、実情は不可能だと思う。それは日常、日頃からの交互の支援というのがあった上でというのがあれば制度上は可能になる。

■委員長　県でも病中・病後児保育の話がよく話題になっていたが、なかなか単独の自治体でこれを充実させるのは難しいところがある。

■委員　今のところ単独では実施している所は聞いたことない。

■委員長　県としては何かそれに対する対応・支援というものはあるか。

■委員　今はまだ検討しているところではないか。

■事務局　総合子育て支援センターでは病後児保育を併設した形で行う計画です。病後児になるので回復期や一定治療も終わって、けどやっぱり保育での集団生活は不安だから静かなところで保育をしてもらいたいという病後児は考えていますが、病児になりましたら、今、正にどれだけ病状が急変するかも分かりませんし、なかなか難しいところです。

■委員　医療と繋がっていないといけないと思う。

■委員長　病院を併設しているかどうか。この辺も子育ての環境から見れば充実させていかないと心配ですし、色んな意味で働けないというようなことが出てくる。

最初の部分でいただいた指摘、質問もかなり平成 29 年度に繋がる話があったかと思う。課題自体はすごく重いモノがあがっていた。対応が難しいこともあるかと思うが、だからこそ、色々な要望等が聞かれ、改善が図られ、例えば市単独の事業で解決が図られてきた部分はすこし緒についてきた。残っている課題は非常に深刻で、かつ、多くの方々が係わっていかなければいけない。あるいは国全体の課題にも通底する部分があるので、知恵の出し合いになると思われる。いずれにせよ、今日のご意見は、受け止めていただき、関係担当課でまた、横串を刺しながら積極的に連携を図って頂きたい。

５．その他

６．閉会